

園番号 713

令和6年度 奈良市立若草こども園 研究実践概要

園長名 檜内 祐子
全園児数 44名

1. 研究主題 「生き生きと意欲的に遊ぶ子どもをめざして」
～心と体を動かし、夢中になって遊ぶ環境づくり～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

昨年度まで子ども自らが身近な環境に関わり、主体的に遊べるような環境づくりに取り組んできた。子ども達は自ら遊びを見つけて遊んでいたが、遊び込むまでには至っていない姿も見られた。今年度は子どもが主体的に遊び、心と体を動かして遊べるような環境とは何かを探っていきたい。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもが身近な環境に主体的に関わり、心を動かしたことに夢中になって遊ぶための環境や援助について検討し、実践していく。

②研究の重点

- ・研究主題について職員間で共通理解を図り、具体的な取り組みの方法を探る。
- ・職員間で具体的な子どもの姿を出し合い、丁寧に見取る中で子どもが夢中になって遊ぶための環境構成や援助の在り方を探る。

③活動の方法

年度初めに子どもの姿を出し合い、研究主題を設定し、全職員でねらいについて共通理解する機会をもった。その後、実践を重ねる中で、乳児組・幼児組で子どもの遊びの様子を話し合い、子どもの興味・関心に応じた環境、遊びがより深められる環境構成を工夫する。

【0歳児】 「ボールがいっぱい」

春より保育者と一緒にボールプールの中で遊んだ。ボールを手の平で触ったり、寝転んでバタ足をするようになったり、全身でボールの感触を感じたり、五感を刺激する遊びをしてきた。8月頃にボールプールの周りにウレタン遊具を置いて安全に遊べるようにしたことで座る・這う・つかまり立ち・歩く等の姿勢で遊ぶことができた。また、「おいでー」「待て待てー」と誘いかけて、一緒に体を動かして遊んだ。繰り返し遊ぶ中で、嬉しそうに子ども達で遊ぶ姿が見られるようになった。



<反省・評価>

保育者と一緒にボールプールに入ったり、ウレタン遊具で四つ這いで遊んだりして、楽しい経験を繰り返せるように関わった。保育者との信頼関係の中で、子ども達は安心して遊べるようになり、探索活動も広がっていった。これからも子どもが興味・関心をもって遊びたいと思える環境を見直したり、できるようになったことを一緒に喜び合ったりして、安心して遊べるように工夫しながら取り組んでいきたい。

【1歳児】 「ビリビリいっぱい」

片栗粉、寒天、氷、春雨など感覚遊びを楽しんできた中で、初めて新聞遊びを取り入れた。子ども達は、「これはなんだろう」と不思議そうに見ていたの、大好きな『いないいないばあ』遊びをして徐々に慣れていけるようにした。手指を使って破ったり、手の平で握ってボールのようにしたりといろいろな形に変化することに興味をもってきたので、タライを用意しお風呂に見立てたり、布団に見立てたりして保育者や友達と一緒に見立て遊びも楽しめるようにした。「ちゃぷーん」と言って破った新聞紙をタライに入れて入ったり、「ねんね」と言って優しく友達を寝かしたりして新聞紙の感触を喜び遊んでいた。



<反省・評価>

初めての素材だったので、感触を味わえるように手指の発達や興味に合わせて、一人一人に合った関わり方を工夫した。手指を使ったりダイナミックに遊んだりしたことで、お風呂や布団などに見立てて遊ぶ姿も見られ、全身で新聞紙という素材に触れ楽しむことが出来た。

【2歳児】 「かたいのがいいねん」

春頃から、子ども達が見立て遊びをしやすい牛乳パック、積み木を置いた。初めは、床一面に並べる子、高く積み上げる子など、個々に遊んでいた。遊びが盛り上がってきたある日、車をつくり始めた A 児。積み木を立ててドアに見立てたいが、思い通りにいかず、試行錯誤をしている。傍にいた B 児が「かたいのがいいねん」と A 児に話し、2人で何度も試していくうちに立てることに成功し、車が完成した。できた車を見ながら「買い物行こう」、「映画行こう」と A 児と B 児が話していると、それを聞いた別の遊びをしていた子ども達も同じ車に乗りこみ、出発した。



<反省・評価>

遊びの中で、試行錯誤を繰り返し、なかなか上手くいかない場面や子ども同士のやりとりを見守ることで、子どもが“やってみたい”を実現出来るようになってきた。こうしたさりげない援助が、自分で出来た満足感や自信につながると考えられる。また、遊びの中で子どもの面白い発想に気が付くことが出来た。

【3歳児】事例「入るかな。やってみよう」 10月

<ねらい> ○ 保育者や友達のしている遊びに興味をもち、自分の思いを出しながら、したい遊びを十分に楽しむ。

心を動かして夢中になっている子どもの姿 _____ 環境 _____ 援助 _____

2学期に入り、保育室でペットボトルやテープの芯等の身近な素材を使って転がし遊びが始まり、園庭でも遊ぶようになった。ある日、A児がトイや塩ビ管を使ってコースをつくりながら保育者と遊んでいると、台に立てかけて使っていたトイや塩ビ管が、玉を転がした弾みで崩れ、地面に倒れた。A児「倒れちゃった！もう一回つくる」と保育者に伝え、A児が塩ビ管の端を持ち上げた。①「重たいから先生も手伝うよ」と保育者が反対側の塩ビ管の端を持つとした時、偶然塩ビ管を立てたような状態になった。A児「高いな」と塩ビ管を見上げた。①「本当やね」と頷く。すると、A児「あ、いいこと考えた」と、地面に転がっていた玉を拾い、塩ビ管の上部を目がけて投げた。①「すごい！入りそうだね」と驚きながら、笑顔でA児の姿を認めた。A児「入るかな。やってみよう」と玉を手を持てるだけ拾い、投げた。A児の様子を傍で見ていたB児が「僕もやりたい」とA児の真似をして玉を投げた。A児も続けて投げる。①「おいしい！もう少しで入りそうやね」と言うと、A児は築山の上に登り、「ここから投げてみる」と、玉を投げた。B児もA児と同じように築山に登って玉を投げ、何度も試していた。

<評価・反省>

保育室で子ども達が興味をもって楽しんでいた転がし遊びを戸外でも楽しめるように、素材や道具を身近な場所に置いておき、子ども達が気付いて遊びに取り入れられるようにした。投げ方を変えながら何度も繰り返し玉を転がして遊ぶ中で、偶然に起きた出来事を遊びの一部と捉えたA児の姿に保育者もすぐに反応し、塩ビ管の穴に玉が入るように、A児が玉を投げる度に少しずつ塩ビ管を動かしながら支え、玉が入る瞬間が来ることを、A児と共に楽しみにしながら見守った。また、友達の様子を見て、自分も真似てやってみようとするB児の姿も笑顔で認めた。



保育者も一緒に遊びに参加し、子どもと一緒に偶然の出来事を楽しむ姿を見せたことで、子ども達は「もう一回やりたい」「こうしたらできるかな」と、より意欲をもって遊ぶ姿につながった。

【4歳児】事例『サーカスごっこ』 12月

<ねらい> ○友達と思いや考えを出し合いながら、イメージを共有して遊ぶ。

心を動かして夢中になっている子どもの姿 _____ 環境 _____ 援助 _____

園庭で平均台やタイヤ、マットなどの用具を保育者と一緒に組み合わせてサーキット遊びを楽しんでいる子ども達。「はしごは跳び箱につけたらいいんじゃない」「タイヤで山をつくりたい」など、思いついたことを出し合い、いろいろなコースを試している。遊びを進めていく中で、サーカスがテーマの絵本に出会い、「サーカスごっこしたい」という声があがり、「橋にトゲトゲをつけて渡ったらおもしろいかも」「火の輪くぐりもしたい」など、絵本に出てくるサーカスの演技が出来るような道具を保育者と一緒に探してつくった。また、遊びの振り返りの中で「いもむしれっしゃ」の絵本に登場するクモの巣をサーカスに取り入れたいという意見が出て、「クモの糸は何でつくったらいいかな」と、保育者も一緒に考えた。すると、「お部屋の縄跳びを繋げたらいいねん」と、手編みのロープが適していることに気づき、みんなで繋ぎ合わせて大きなクモの巣をつくった。周りで見っていた友達も興味をもち、「一緒に入れて」と参加する子どもが次第に増えていった。



<反省・評価>

絵本からサーカスごっこに発想を膨らませていく過程で、様々な用具を選べる環境づくりをしたことで、試したり見立てたりして遊びを続けることが出来た。また、振り返りの時間をつくることで、イメージを共有しながらより楽しくなる方法について考えることに繋がった。

【5歳児】事例『お風呂ごっこしよう』 6月

<ねらい> ○友達と共通の目的をもって遊ぶ楽しさを味わう

○砂や泥、水などの特性に気づき、試したり工夫したりしながら遊ぶ。

心を動かして夢中になっている子どもの姿	環境	援助
---------------------	----	----

砂場で友達と一緒に穴を掘って水を入れ、お風呂ごっこをしていた。「もっと深くしたいな。お水を入れよう」と何度も何度も水を入れながら、「お水溜まらないなあ」「なんでかな」と話していると、「土にしみてるから減っちゃうんだよ」とA児が言った。部屋に戻ってから「しみ込まないようにするには、どうしたらいいかな」と考えを出し合った。もっと深く掘る、画用紙を敷く、周りを高くするなど沢山考えが出た中で、ビニールシートを敷くことに意見がまとまったので、保育者がビニールシートを用意することになった。

翌日、深く穴を掘ってからビニールシートを敷き、水を入れていくと、どんどん水が溜まった。「すごい溜まった」「みんなで一緒に入ろう」「せーの！」と掛け声に合わせて溜まった水に一斉に足から入った。みんなで考えを出し合った方法がうまくいき、とても満足そうに水の中に足をつけて、遊びを楽しんでいた。



<反省・評価>

うまく水が溜まらないことから、水や泥の特性に気付けるように見守り、じっくり試せる時間を確保した。話し合いをして考えを出し合う中で、「紙は濡れたら破れるよ」「小さいビニール袋つなげてみる」など、生活の中で経験したことを基に自分の思いを存分に出し合うことができた。いろいろ試したり失敗したり成功したり友達と共有することの楽しさを経験させることができた。

5. 研究の成果

子どもの発達や興味・関心に基づいて玩具や遊具、素材等を用意し、子どもが意欲的に遊べるように環境を整えてきた。乳児は安心できる保育者との関わりの中で「やってみよう」という意欲をもって遊びを楽しむことができた。幼児は遊びの中での気づきや思いを振り返りで言葉にして伝え合い、そこから環境を再構成することで遊びの発展や継続に繋がった。そして、子どもは心と体を動かして夢中になって遊び、「おもしろい」「もっとしたい」という意欲をもって活動することができた。

6. 今後の課題

- ・子どもが夢中になって遊ぶ姿を見取る中で、子どもの心の動きを敏感にキャッチし、心を動かした要因を探り、更に遊びが発展するための環境構成や保育者の援助を検討し、職員同士で共通理解を図っていく。
- ・子どもが自ら気づき、考え、試行錯誤しながら継続して遊べる場と時間を保障していく。